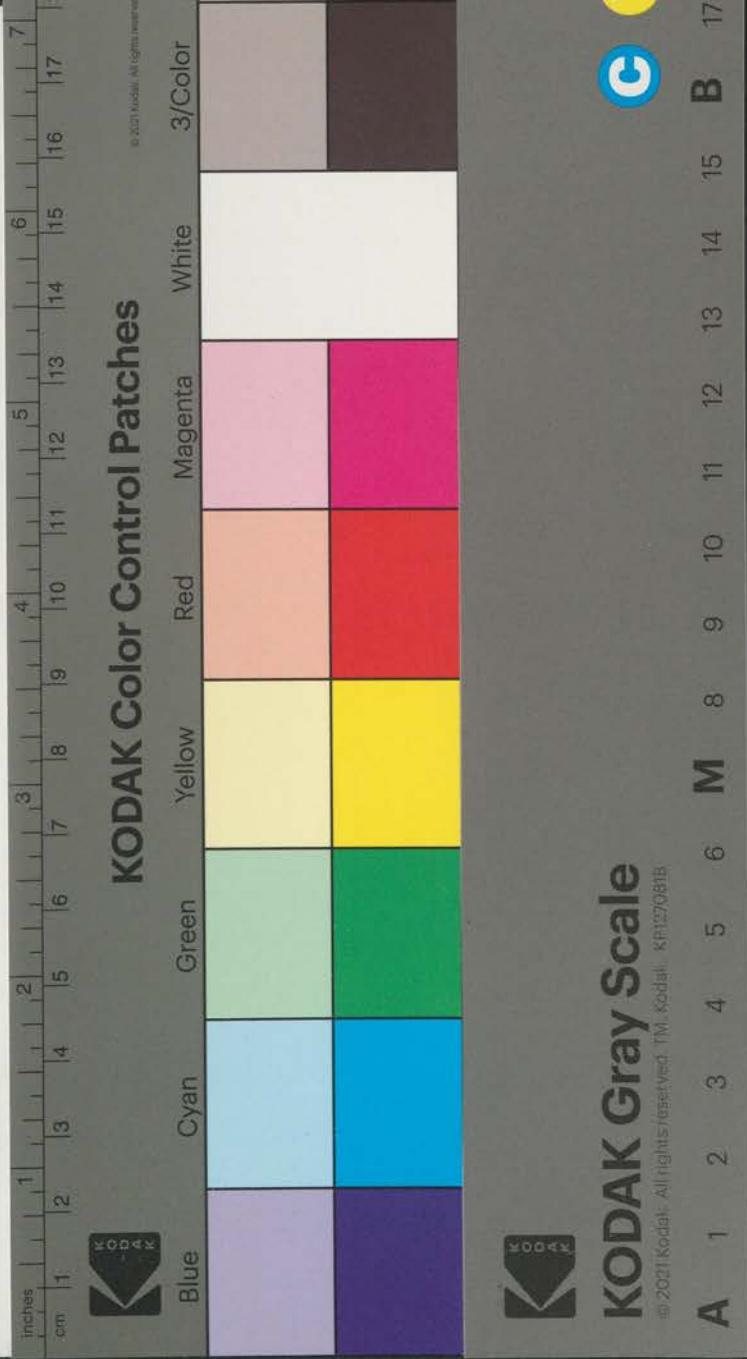


足袋から觀た經濟生活

足袋の話

早稻田大學教授
出井盛之著



表紙の説明

表紙の老人は、東京市日本橋區浪花町若荷屋足袋舖の包紙に描かれてあるものである。足袋製造の *Bantshidung* は萬治二年江戸に於て、櫻井六右衛門によつて創められた。これが若荷屋であつて、最も古き足袋の老舗である。寶曆現來集に左の如き記録がある。

「足袋賣 明和より天明頃迄は、九月末より二月中旬頃迄賣歩行、其呼聲袋足袋さし袋連、聲を引て賣歩行、年の暮に至ると兩掛の葛籠を荷なはせ、自分は財布を肩に掛けて賣歩行しが、是もいまはいつ止となく來らず」

溫顔の老人は明和天明頃存命した若荷屋先代の一人で、足袋業を注文生産より市場生産へと、一步を進めた人であるに相違ない。

題字「足袋の話」は法學博士平沼淑郎氏の執筆を煩はしたものである。

足袋の話

出井盛之著

足袋から觀た經濟生活





は し が き

この小著は、大正十三年六月號「我等」に載せた、「足袋雜話」に多少の修正と、挿繪と、註とを加へたものに過ぎない。これは自分の手許に蒐集した研究資料の綜合的發表では勿論ない。

わたくしはたゞこの小冊子を、われ／＼の脚下にどれほど近く、産業革命の結果が押し寄せて居るか、それを照すフットライトとしたいばかりだ。また此の書が、多少でもリアリスチックな研究の刺激となれば幸だと思ふ。

文を行う中に挿んだ川柳は、法學博士岡田朝太郎氏の撰によりしものである。

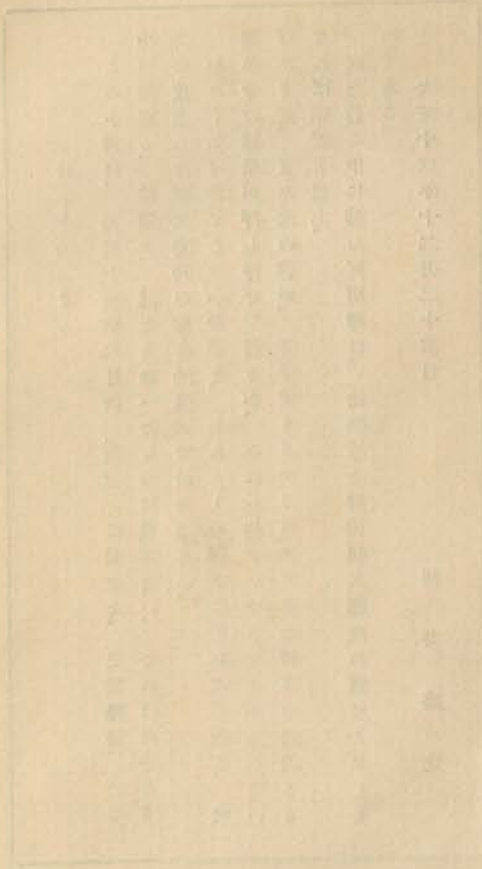
大正十三年十二月二十五日

田井盛之

足袋の話

挿 畫

足袋賣	表紙
足袋師	一五頁
筒足袋	一七頁
こはぜ足袋	一八頁
昔の足袋店	二五頁



木曾の御嶽山は夏でも寒い

裕やりたや足袋そへて

(俚諺)

足袋の話

出井盛之著

—

わたくしは、日本人の日常生活に極めて親しい何かの貨物をとつてそれを通して近代の生産技術の發達が、如何なる影響をわれゝの生活の上に及ぼし、如何なる問題を社會に惹き起して居るかといふことを、はつきり人々の眼の前に示すことができたら、有益でもある、且つまた愉快でもあると久しい以前より考へて居つた。そ

の目的のためには、足袋が最も適當だと氣付いたのは二年程まへのことであつた。けれども、足袋及び足袋事業に就いて組織的研究をする機會は、最近まで與へられなかつた。曾て時折わたくしは足袋はきつとあもしろい研究材料を、提供するに違いないといふことを、友人達に話したこともあつた。その時わたくしの意見は否定されはしなかつたが、積極的に賛成してくれなかつた場合が多かつた。しかるに、わたくしの數人の知己——早稻田大學の學生——は、大いにわたくしの足袋研究に共鳴し、ともに此の比較的小さい經濟貨物の研究をすることになつた。わたくしどもの研究は、まだほんの端緒についたといふに過ぎない。これが完成でなくとも、ほゞ一段落といふ程度にまで漕ぎつけるには尙多くの時間を要することであらう。

二

最近、關東と關西の足袋界を、鳥瞰圖的に調査した。その大體について早大の學園で發表する機會を得たところ、わたくしどもが豫期したより以上の興味を各方面に呼び起したので、非常な喜びを感じると共に一層の努力を以て研究せねばならない責任を負はせられたやうな感を強めたのである。不十分な研究を未熟のまゝに公にすることは、多くの人々の期待を裏切ることになりはすまいか、これをわたくしは本氣で心配した。

けれども、翻つて考へてみるとわたくしどもの鈍い學問的良心をこゝまで高めたのは貧弱ながらも足袋を見ようといふ、わたくしど

もののグループの信念が、多くの人々によつて理解されるやうになつたといふ、成功を示すものではないかとも思はれる。

わたくしの最初からの目的は、足袋といふ世間から餘り多くの注意を拂はれてない貨物によつて、現代の文明を載せて居る、巨大な近世經濟組織を窺つて、之れをコンクリートに解剖し、批評し、且つ若しでき得るならば、將來社會をも窺ひ知りたいと希望した。小さなある實在は、大きな真理をはつきりと映してくれる望遠鏡であり、顯微鏡であるといふことを、足袋によつて證明したいとわたくしは、はじめから考へて居つたのである。

三

澤山の貨物、または産業の種類の中から、ある特別のものを撰擇して、之れを研究對象と決定するものは六づかしいことである。足袋と足袋産業が研究對象として珍らしい地位を示すことは、それが純日本のものであるといふことである。わが國民の生活様式は、大部分外國より傳來したものであるから、ある貨物なり、産業なりに就いて、その起源及び發達の徑路を辿るのには、我が國內に於て求むるよりも、支那、朝鮮、或は歐米諸國に就いて研究するのが至當であることを發見するのが多くの場合である。しかるに足袋は、日本固有の貨物であるがため、足袋はわが國民の生活を最も明かに映してくれるものである。足袋と丸つきり反對の方向に例を求めて、帽子を観察するならば、それは勿論外國よりのものである。そのほ

かの衣服冠飾に限らず、わたくしどもの周囲を繞ぐる經濟貨物は、多くはその起源と發達を外國に有して居るのである。しかるにわが足袋は、われらの脚下に日本固有の文化を獨創し、進化して來た。今日では形勢稍々非なるにも拘らず、飽くまでも、足にしがみつゝ、わが國の精華を保持せんとして居る。その意氣は大いに買つてやらねばなるまい。

「たび」の語源については、多くの異説があつて定らない。辭書言海には「Tapis」といふ蘭語より移れるかとあるが、和蘭との交通が開ける以前に、わが國には「たび」なる言葉は存在して居つた、故にこの説は大いに疑はしいと言はねばならぬ。やつぱり「單皮」または「踏皮」にその語源を求むるのか正しいらしい。足袋は古の襪シタウキより發達したも

ので、^(三)襪は外國より傳つたものであらうが、足袋そのものは、わが國民の獨創した貨物であるに相違ない。

四

今日わたくしどもが、普通持つて居る觀念の足袋は、比較的新らしい歴史を有するに過ぎない。ずつと昔の足袋は、たいてい鹿皮製であつたのである。その皮製の足袋が、いつの時代より行はれたものであるか、その起源をはつきり辿ることは困難であるが、武家が襪を改造して、大指のわれめをこしらへて用ゐたらしい。

川柳

革足袋屋四五間先をふところ手
革足袋屋大阪下り嘘のかは

足袋の話

革足袋屋サカイノで賣り付ける

現今わが國に一般用ゐられて居る足袋と、ほゞ同じ様式の木綿足袋は、徳川時代の初期に發達したものである。長岡三齋の母が創めて造つたと云はれて居る木綿足袋^(四)は、四代將軍家綱の明暦三年正月の大火を動因として、江戸市民の間に民衆化し、參勤交代の制度を有した社會組織は、忽ち江戸の流行を全國化したのである。振袖火事と云はれた明暦の大火が、なぜ木綿足袋の發達に關係があるかといふに、大火後江戸に於ては火消の制度が整備され、火事裝束として革羽織革頭巾が用ゐられるに至つた。この爲めに革皮に對する需要が急に増加したので、革皮の値段を騰貴せしめた。そこで木綿にて足袋が作られることゝなつたのである。^(五)

明暦の大火を奇縁として、足袋がわが國民の間に民衆化したことは、一面に於ては人口の増殖に對して鹿皮の供給不足を物語ると同時に、木綿紡織の技術的進歩を示すものであるが、大正の大震災後、著しく日本人の服裝が洋服化しつゝあるのと對照して考察するならば、天災が人間の生活様式に及ぼす影響が觀察されておもしろい。

今日に於ては、概して男は紺又は黒足袋を、女は白足袋を穿くのを通例として居る。けれども今も稀には、むかし用ゐられた緋足袋や、模様のある金巾足袋をはくものがあると思えて、現にわたくしは先頃京都市にて此種の足袋を、販賣しつゝある足袋店を見付け、緋及び金巾足袋數足―皮肉にも全部機械生産のもの―を求めて歸つた。店員の談によると、大阪で主として實用的に用ゐられて居ると

云ふことである。初めは性別によつて色を分つことはなかつたやうであるが、貞享の頃から女は白晒木綿、男は薄柿木綿の足袋を穿いたもので、紺足袋は京都の盆踊りの風俗より出でたと云ふ説と、鷹野より出でたといふ説を聞いたが、このことにつき江戸風俗の研究から教を仰ぎたいと思つて居る。

五

源順の和名抄に、「野人以鹿皮爲半靴名曰多鼻」とある。之れを見ても、足袋は貴族的の起源を有するものではない。しかるに足袋が現今の如く、老若男女、貴賤貧富を問はずして用ゐらるゝまでに民衆化するには、可成り永い歳月を要したのである。「ぼうふらも蚊に

なるまでの浮きしづみ」とやら、足袋がデモクラシーに徹底するまでにはすくなくない苦心を要したのである。

明暦の大火によりて一般化した足袋は、元祿に至つては、極めて重要な服装の一部となり、動かす可からざる地位を占むるにいたつた。従つて當時に於ては、様々の品質で足袋が製せられ贅がつくされた。けれども徳川時代にあつては、足袋も驥足を伸ぶる自由の世界を有しなかつた。そうして、いろ／＼な制度がその發達に加へられてあつた。その束縛の一は、一點一劃をも更めしめないとする儀禮的社會統制であり、他は禁奢侈令である。齋藤隆三氏の近世世相史に、「元祿の世水鳥下也なるもの江戸に出で、室町家に於ける、武家式禮所謂小笠流の禮式を普及し、社會の制裁として人の自由を

極端に束縛しぬ。(中略) 殿中足袋の紐の長さ二寸五分なるを三寸に改むるに目付衆の許可を仰くといふ程にもなりたり^(一)とある。

往時の足袋着用の制度は、各社會階及に對し、また年齢に對して、細々しい干涉を加へて居つた^(二)。現今のやうに通常の服裝については、全く自由である時代より見れば、斯の如く區々たる足袋にまでも、やかましき干涉をなしたのは不思議にさへ思はれるのであるが、何れの國家も、ある時代に於ては、滑稽の程度に達するほど、個人の日常生活に干涉を試みたものである。また足袋の着用時期及び足袋の色彩が禁奢侈の意味に於て、法令によつて規定が設けられて居つたことは、防寒、衛生のために實用品として消費せらるゝ今日より考ふるならば解し難いことゝ云はねばならない。やかましいわが禁

奢侈令の中に足袋のあつたことは、外國の學者によつて見逃がされては居らなかつた。^(三)

六

明治に至つても、その初期に於ては、下女下男は主人の前では遠慮してはかなかつた。足袋がすべての社會階級の人々によつて、廣く着用せらるゝに至つたのは、極めて最近のことであると云はねばならぬ。囚人が足袋を用ふることになつたのは、昨年からのことである。と先頃の新聞は報じて居る。^(四) 東京は足袋の原産地で、最も古き足袋店はこゝに開かれ^(五)、足袋製造の技術も東京に於て最も優れて發達した。^(六) 關西では足袋をはくにも經濟的効用を主とするに反して、

江戸兒は趣味としてはくのであるが、^(四) 奇抜にも之れと正反對に同じ目的から、全くはかないものもある。「伊達の素足」と稱するものが之れである。江戸の遊女は足袋をはかなかつた。

川 柳

足袋のたけ初めて知つた運の好き
傾城は足袋屋にばかり借がなし

吉原の足袋屋禿が得意なり

足袋が六千萬の人口に、日常愛用せらるゝに至る迄には相當な苦心があつた。今日でこそ足袋産業は近代の産業技術を應用して、押しも押されもせぬ地位を占めて居るが、往時の足袋屋は、座職として餘り高尚な職業として世間から考へられなかつた。故に足袋屋足袋師に關しては、足袋そのものに關するよりも文献が少ない。わが



(桑圖蒙訓倫人)師袋足

國の學者は好んで美術の歴史を調べたが、足袋や足袋師に就いては組織的研究をなさなかつた。また畫家は山水や、花鳥や、美人を撰んで描いたものが多いが、足袋を作りつゝある人を寫したものは極めて少ない様である。但し人倫訓蒙圖彙中の足袋師は珍とするに足ると思ふ。

七

保守的な小さい足袋の構造も、仔細に研究するならば、幾多の變遷を経て來た。また今日の足袋も常に改良工夫が加へられつゝある。近頃では殆んどは、掛けの足袋のみ用ゐられて居るが、紐足袋が一般に使用せられて居つたのはまだ多くの人々の記憶に残つて居る

ことで左程古いことではない。紐からこは、紐に變化したことは、大體の足袋構造に於ける近來の大變革であるが、昔時の足袋は筒長く、



(彙圖蒙訓用女)袋足筒

川柳

足袋の紐結べば蜜柑轉げ落ち

足袋の紐結んでそして直す體

襟見せる心で結ぶ足袋の紐

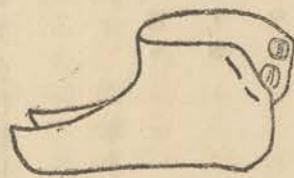
足袋の紐解けたで御姫様が知れ

近來の足袋は淺くして踵の上にあまり出でないやうになつたことも著しい變化である。つい近くまで足袋の後の部分に、たと稱する處

が甲と別に断たれて縫ひ合されてあつたのが、今は普通縫ひ目がなくなつてた、つは甲の一部分となり獨立したものではなくなつた。その他種々な小變化があるがそれを述べるのは、こゝには煩はしい。

構造の變化よりも、材料の品質が變化するのは、

人目に觸れ易いことである。皮足袋の時代にも獨り鹿皮のみが材料ではなく、熊の皮、猿の皮なども使用されたらしい。布が皮に代つてからは、木綿のみではなく、絹や毛織も材料としてはよく用ゐられ、現今ではキャラコ、朱子、別珍などが多く用ゐられて居る。足袋底は今は大底雲齋であるが、石底も全然廢れた譯ではない。しかし刺底は今は見當らな



こはぜ足袋

くなつた。

八

格好や品質の變化は、人目に觸れ易いが、それは極めて皮想的に變遷を訴ふる許りである。構造や材料が同一であつても、革命した生産組織は、革命された足袋を生みつゝある。經濟學者の云ふ通り、貨物は組織の産物であるに他ならない。故に同じ木綿足袋でも、社會的分業の殆んど無かつた時代と、極端な分業を基礎とした現代とは、外觀は同様に見えても、丸きり内容と意義とに於て差異のある足袋が造られることになるのである。

燈臺の下は暗いのが常であるやうに、われ／＼の足下も亦いつも

暗い。それで、わが脚下に如何に産業革命が押し寄せて居るかに、氣がつかない人が可成り澤山ある。わが國の社會運動家が産業革命即ち近代産業に於ける技術的變化を叫ぶと、保守的人々には、それは英國の産業革命史の暗誦だといふ位にしか評價しない。わたくしは斯様な人々に、足袋を御覽じろと云ひたい。自分自身の足に着けて居る足袋をよく觀るならば、夫れは全く産業革命されたものであると云ふことを知るであらう。そうして尙一步を進めて考察を試みるならば、足先に穿いて居る足袋が、極めて機械生産の近代的であるに反して、頭上に戴いて居る、政治や法律や社會の諸制度が、中世紀的であり、手工業時代のものであるといふ大きな矛盾を意識せずには居られなくなるであらう。現代社會の不調和、及びこれより

生ずる社會的不安は、みな根源をこの矛盾に發するのである。

是非なさねばならぬ仕事として、われ／＼に與へられたことは、近代の技術的變化が人間生活と社會組織に及ぼした影響とを、詳しく研究して人間がつくりつゝある文明に對して、強い批評を加ふるといふことである。わたくしは足袋が最もよい材料をこの目的のために供給してくれるといふ信念によつて、足袋研究を思ひつき、今後多くの人々の力をかりて、研究を進めてゆきたいと希望して居る次第である。

九

わたくしどもが今日穿いて居る足袋は、機械生産の足袋である。

手工の足袋といふものは殆んど無くなつたと云つても過言ではない。手縫の足袋は、恰もハンドメイドの靴が外國でブルジョア階級のみによつて需要されて居るが如く、たゞ贅澤品としてのみ存在して居る。^(三)東京に足袋の手工業が比較的多く残つて居るのは、東京の人々は足袋を趣味として穿くからで、實用を専一とする關西では、手工業的足袋店は早く滅びた。しかし足袋のスタイルをやかましく云ふ東京でも、ハンドメイドの足袋を供給する店は極めて少數となつて了つた。茗荷や、中川や、ゑびや、大和やなどといふ老舗へ行けば、格好のよい手縫の足袋が買へるが、値段は非常に高い。機械製ならば七八十錢のものが、手縫では少なくとも一圓二三十錢はたしかにするであらう。それに一足二足の注文は引き受けてくれない。半ダ

スを最少限度として居るから、とても中産階級以下の人々は手が出せないことになる。老舗で足の型を取らせて特別注文で造つて貰つた足袋も、今日では全部手縫で仕上げたといふものは殆どなくなつて大部分はミシン縫で、つまのやうに機械を使用しては、どうしても行かない處だけを手縫にしたものが多い。であるから純粹の手縫足袋は極めて稀となつた。殊にその材料の木綿や、朱子や、雲齋及び縫ひ糸は例外なしの機械生産によつたものであるから、手織、正紺、手縫といつたやうな真正の意義に於て手で仕上げた足袋といふものは、全くわれ／＼の社會から姿を消して跡形もない。未だ老人といはれる仲間に、はいるには遙かに遠い、わたくしどもの少年時代に穿いた手縫の足袋は今日では多大の“Scarcity value”を持

つことになった。何んと産業組織の變轉は迅速ではないか。

十

現在でも邊鄙な田舎に於ては、稀に足袋を自家製して居る處がある。けれども一般の社會生活から見れば、それはもはや問題ではない。専門的に分化した、職業としての足袋手工業者が現はれたのは木綿足袋の發達に伴つて徳川時代の初期である。ブユヒア⁽⁷⁾が説明して居る「賃仕事」(Scot)も足袋の場合に存在して居つた。けれども、足袋を作るに用する道具は比較的簡單で、庖丁、斷板、針、鋸などに過ぎない上に、材料も極めて少量で足るといふ關係から、店を構へた手工業者は早く發達した。足袋は外形が少さく、従つて其

の製法も容易であるかの如く思はれるけれど、事實はこれに反して、



(雀京) 店袋足の昔

技術の熟達までには永い修業を必要とした。それで年期徒弟制度が

他の職業に於けると同様に設けられ、七年間の年期奉公の後、獨立した足袋店を開くのを例とした。足袋師は社會的には高い地位を得られなかつたけれども、利益は割合に多かつたが故に、經濟的には一般に豊かな生活をした。

足袋産業が手工業から家内工業へと、産業進化の一階段を進めたのは、時期の點のみよりみれば江戸が魁であらうが、完成された家内工業制度は關東では埼玉縣行田に、關西では大阪に育つた。足先の趣味の生活をなさでは止まない江戸見の地には、資本主義生産組織の萌芽としての家内工業制度も、完成された資本主義制度としての工場制度も、今日に至るまで遂に其の根を張ることを許されなかつた。

九州の久留米に於ける足袋事業は、早く工場制度の下に大規模生産を行つたが、資本主義精神と、科學的經營法を遺憾なく應用したのは大阪府堺市の足袋産業である。わが邦最大の都會としての東京は、何れの地よりも足袋に對する最大需要者であるに拘らず、市内にも、附近にも一の大工場を有せず、却つて多數の原始的産業の形態を保持しつつあることは、人は經濟的效用にのみ生くるものにあらざるを語る有力なる事實として、經濟學研究者の興味を唆ること切なるものがある。

十一

足袋ほど短期間に於て、日本人獨特の叡智と才能とによつて、手

工業制度より大工場制度へと足を運んだ産業は他に例はない。足袋製造に始めて機械が應用せられたのは、ほゞ日清戦争頃のことである。明治三十年頃から機械の使用が、だん／＼廣く行はれるに至つたのである。それが僅の歲月の間に、足袋産業は最も進歩した生産設備を有することになった。實に驚く可き速い變化である。都下で多く需要されて居る福助足袋は、堺市にある工場で製造されるものであるが、原料の入庫から、裁斷、仕立て、荷造りまで、約六十五の工程順序を経て居る。^(三)多くの人々が、心なく日常穿いて居る足袋が斯様に多數の、分業が更に細分業された勞働によつて作られて居ると云ふ事實に對して充分の注意を促したい。わたくしは最近福助足袋工場を視察する機會を持つた。一年間二千萬足の生産をなすと云ふ、

この大工場があらゆる方面に近代科學智識を應用して居るのには、少なからず驚いた。と同時に、わたくしは幾多の産業社會に於ける諸問題について考へずには居られなかつた。

アダム・スミスがピン製造を例として分業の功德を説いたことは誰れも知る有名なことである。ピンを造るのに、分業が少しも行はれない場合には、一人の職工は、一日一本は造り得るとしても、一日二十本を造ることは、いかに働いても不可能である。之れに反して、十八の作業に分れてピンが作られる場合には、十人の職工は一日四萬八千本を製造し得ると云つて居る。^(三)分業の福音は根強く信仰されて、すべての産業に、分業化と、再分業化が實現された。小さい足袋一足を造るにも今日では六十五の作業を經過せねばならないとい

ふまでに至つた。

分業の進歩は、市場の擴大と、機械の發達との二條件によつて可能とせられる。その發達によつて一般には生産能力が増大して、人間は安く便利に多くの貨物が供給されるものと信じて來た。足袋に例をとれば、手工業時代に於ては熟練せる職人も、朝十足の布を斷つて夕方までに全部仕上げるといふことは余程困難であるとせられたが、今日の機械に依る分業組織で製造するならば、一日一人の平均生産は約五十足である。故にこの事實よりして現代の生産方法は往時に比して五倍の能率を發揮しつゝありと斷定することができるとであらうか。機械生産が人類に安く多くの貨物を供給してくれると従來は無批評的に信じて居つたが、この説には多大の割引を加へて

聽かねばならないといふことに、今日の學者は氣がついて居る。けれども、廣い範圍に於て「社會會計學」といふやうなものの成立は不可能でないとしても、それは事實非常に困難なことである。この場合足袋のやうな小さい世界では、機械の與ふる便利と、人間の支拂ふ金錢に見積り難い人間的犠牲との貸借對照表を作製し易くはないであらうか。^(三)

十二

足袋産業は日本人自身で發達させたのであつて、足袋製造の機械はミシンで輸入品であるけれども、ミシンの一部に工夫を加へて、足袋製造に適當せしめたのは、多くは日本人自らなした。^(四) 故に足袋

産業革命史は、眞に日本の産業革命史である。大小の發明家企業家が輩出して、漸次に資本主義的大規模生産に造り上げた明治三十年より後に於ける足袋事業界の歴史は、十八世紀の末より十九世紀の初頭にかけての英國の産業界を彷彿せしむるものがある。また資本主義的足袋企業によりて、踏み潰された手工業者及び家内工業者の運命は悲惨なる哀史をつくる。手工業者は下職となり、職工となつて全く賃銀労働者となつた。また多くの家内工業者は破産した。過日大阪の羽子板橋附近に帶幸といふ古い足袋屋があるといふ話を聞き、たづね廻つたがない。交番に立ち寄つたが知らないと巡査は答えた。橋の附近にある足袋の小賣店にてなほ尋ねた處、十年程前に破産して、地方へ家族は引き越して了つたといふことであつた。日

本全國の隨所に此の例に類した話は發見せられる。また澎湃たる機械生産の大勢に對して、少數の手工業者が最後まで自己の立場を固守して屈せざる態度は勇敢であると云へば勇敢であるが、寧ろ悲壯の感を懷かしめる。アーノルド・トウキンビーが述べて居る次の挿話は、わが國の各地に活きた光景として現在われ／＼が目撃し得る處である。

「十八世紀の中頃に於ては、ライセスターとその附近にあつては、靴下の製造者は、可成り富有であつたと、ある實見者は言つて居る。彼等は小屋と畑とを所有し、豚や家禽を飼ひ、時には牛をも有した。自家醸造の酒仕事着と日曜着を所有し、餘暇を持つて居つた。彼等は大抵一週間に三日より以上働くことを容易にしなかつた。

つたが、一般には五日働くのが通例で、労働時間は拾時間であつた、約百年の後、チャテイストのトマス・クーパーは、ライセスタに於けるチャテイストの會合より、夜おそく歸路にあつたが、街路を通つて居ると靴下機の音が聴え、上の窓よりは燈火が漏れて居つたので、友を顧みて質した、『一體彼等はいくら稼ぐのだらう』と。友人は『四志六片』ですと答へた。クーパーはなほ『一日に四志六片といふのか』と云つたところ、彼の友人は『否、一週間に四志六片です』と答へた。クーパーは彼自身労働者であつたが、一日十六時間も仕事にかゝつて居りながら、たゞこの些細な金を儲け得るに過ぎないといふことを信ずる事かできなかった。^(註)今日足袋一足の製造に要する労働の直接生産費は、工場生産によ

れば三錢乃至四錢である。この低廉なる工賃と戦はねばならぬ、手工業者の苦境は、察するに餘りある。けれども強き技術本能を有する少數のものは經濟的壓迫を意とせずして、あくまで小さい足袋のなかに、技術美を發揮しやうとして居る。その意氣は大いに認めねばならない處である。

十三

足袋製造の工程が六十五であるといふことは、一人の足袋工場に於ける労働者は、足袋の六十五分の一のみ造るといふ意味になる。しかし、彼または彼女は毎日、六十五分の一の足袋のみ反覆して造つて居るのであるから、六十五分の一の足袋を造ることを知るも、

昔の手工業者の如く始めより終りまでの工程を知つて、完全した足袋一足を造り上げることは全然知らないものである。つち屋や、福助の足袋工場には約二千人の男女が働いて居る。彼等よりすべての機械を取り去り、分業の制度を破壊して、原料のみ残し、一足の足袋を造れと命じたならば、二千人の中果して幾人、その技術を有するであらう。恐らく一人もよく一足の足袋を造り得ないであらう。彼等は六十五分の一の足袋は造り得れど、一足の足袋は造り得ないのである。機械によつて生産を行ふ時は、人間の技術は機械に吸収されて、人間は機械の補助者と化して了ふのである。^(三)

若し人間が機械より實質的に利益を享けて居るならば、人間が機械の補助者であらうと、またどうであらうと體面上の問題は大いし

たことではない。然し問題の要點は、大規模的機械生産が果して人類に對し、どれだけの利益を實際に與へつゝありやといふ點で、これは未だ解かれない疑問として残されてあるのである。私有財産を基礎とした機械至重主義の資本制度が、結局人間性を最も満足さすものか、それとも機械生産を無批評的に受け入れた社會主義制度が、最も人類に幸福を與ふるであらうか、それともまた、中世紀主義的無機械社會に歸へるべきか、これ等の諸問題の岐路に人間は立つて其の行くべき方向に迷つて居る。小さい足袋の研究が、この大きな問題の解決に多少でも貢獻するならば、意義なきものとして終らないであらう。

十四

この小篇が、若し足袋産業ほど、日本の産業進化の歴史を、典型的に示すものはないといふことを、明白ならしめ得たならば、まことに幸である。足袋はわが國固有の貨物として生れた。故にその製作技術も生産組織も、日本人自力で工夫し、發明し、發達せしめねばならなかつた。こゝに足袋産業が、必然的にわがくに産業の代表者としての運命がある。勿論足袋のほか、日本固有の貨物と稱せらるべきものは多數ある。けれども、それらの多くは、足袋の如く近代の産業までに發達せずしてすでに亡びたるか、または現在まで命脈を維持しつゝありても、生産方法が産業革命化されて居らない。

われらの經濟生活を如實に語る、この足袋と足袋産業を研究することにより、わが社會に於ける問題に關し、如何なる暗示を受けねばならないであらうか。この小冊子にはこの點につき多く論じなかつたが、われ／＼は深き思ひをこゝに凝らさねばならない。

足袋は風俗史からも、經濟史からも、または經濟學の立場からも、研究對象として興味がある。わたくしの貧弱なる研究の試みに讀者諸君の御指導を賜はることを得ば、まことに幸福である。

(一) 倭名類聚鈔「野人以鹿皮爲半靴名曰多鼻宜用單皮二字乎」。註倭名抄「多鼻名義未詳源君欲以單皮字爲之恐屬牽強」。倭名類聚鈔は源順の選述したもので、朱雀天皇承平年中に成りしものである。

(二) 嬉遊笑覽「下學集には踏皮とかけり、また林逸節用集には踏皮同襪と出たり。襪をたびとしたるは是なとや始ならん」。新井君美編東雅「古畫に旅人鹿皮の半靴を付しを見る、

たびとけ旅なり、行旅の具なる故にたびくつといひしと見えたり。

(三) 秋齊閑話に「襪の事、東帯の時ははき衣冠の時ははかず、これは應仁亂の時よりの例にか、今の足袋、元來襪なり、今堂上に用ゐる襪の製、大指のわりめなし、それにては用方あしき故、武家にて大指のわりめをこしらへ、足袋と名付けて今に用ゆ、もとは襪なり、襪にては草履ははかれず、むかふにはな緒を二つ兩方に付たる草履をはくなり、足袋とは餘程製かはるなり。」

(四) 翁草に「木綿足袋の事、木綿足袋は今の製法の如くなるは、長岡三齋の母初めて製す、三齋の茶の會に出らるゝ時足冷えるとしてなり。」

(五) 落穂集に「大火事（明暦三年の大火）以前よりのことは大名がたを始め、すゑずゑ草足袋より外はもちひ不申候、酉戌火事已に諸人革羽織草頭巾を拵候故鹿皮入用多く草足袋高價になり候故未々は男女とも木綿足袋を用ひ候様に罷成候。」

明暦大火後に於ける江戸の火消制度に就いては、松平太郎著江戸時代制度の研究四三九頁―四四一頁を参照。

(六) 今回の大震災火災後、坪内逍遙博士が洋服化したるが如きは、その著しき例である。

(七) 木綿足袋の起源は茶室と關係があるらしい。茶は有閑階級の遊戯である。故に今日の足袋は有閑階級の色彩を有して居ると云ひ得る。これが能率的な近代の民衆生活に於て足袋が他のものに侵される所以であらう。

(八) 齊藤隆三著近世世相史七五八頁。

(九) 翁草に「正和二年三月二十七日新制云、足袋御免の事、年齢五旬以後可被免許、但雖不及此齡爲病體者蒙御免可着白革煙草。」

〔右は明應三年將軍御元服開書十二月二十一日記に在と云々、今は足袋に年齢の差別ある事を不聞、老幼ともに履くなり、九月節句後より三月節句迄は御免、依頼は足袋も御免なり、革足袋の事落穂集に以前は木綿足袋許なりしを、元和寛永の頃より、革足袋始りし様に記しぬれ共、此話を見れば、革足袋はいとも古き事と見えたり、總じて中古已來國史傳らされば、事實を失ふ事のみなり。〕

古事類苑、服飾部五五頁以下を参照。

(一〇) *Recess, Social Psychology* (P. 101-102) は Hearn, Japan; An Interpretation より我國の禁奢侈令に關して引用して居る。

足袋の話

(一) 大正十三年三月三十日東京日々新聞に「……昨年の冬期以來、既に實施されて居る四人に足袋をはかせる事、並びに齒みがきや楊子を使用させる事は、保健上今日まで好成績をあげてゐる云々。」

(二) 表紙の説明を参照。

(三) 東京足袋は關西に於て珍重せられる。

(四) 江戸兒は足袋に就いて極めてやかましい神經の所有者である。その一例として久保田万太郎氏を挙げやう。左は大正十三年六月號「新潮」所載「人間隨筆、最近の久保田万太郎氏、足袋のこと……牧野信二」より抜粹。

僕はこれで、白足袋といふものは、未だ嘗てはいたことはないんだぜ——

久保田氏は、往來に出ると、さういふ意味のことを、もつと齒切れのいゝ言葉で、だがいかに何らかの辯明らしくティミッドな調子で、突然ボンと云つた。さう云はれたので初めて私が久保田氏の足もとに眼を注ぐと、そこにはちゃんと雪白の足袋を着用した足が

性急に運ばれてゐるのである。私はもう少しで「ぢや、それはどうしたの？」と訊き返すところだつた。此方は、大の迂闊者である。にも關はず万太郎氏は、此方の眼識を重んじて「？」往々それに類する正直な辯明を發しては、此方をぼかんとさせる人だ。

「途中で紺足袋を買つてはき換へるつもりさ、どうしてこの儘芝居へなんて行けるものか！」

「なるほど。」と私は點頭いた。「足袋が氣になつて、批評が反れては困るだらう。」

「役者に氣の毒をしてしまふ——。」と万太郎氏は笑ひながら云つた。この日は、芝居の合評會へ行くのださうだつた。(駿河臺から本郷まで私たちは歩いてしまつた。)

万太郎氏は、歩くのは得意だと云つた。なる程、胸を張り出し、歩調は大まかのやうでスタスタと速いことだ。たしかに調歩のかたちだ。それに歩なみをそろへるには、私は輕い努力をしなければならなかつた。私も、歩行ののろい部類の人間ではない筈なのだが。私は、「ソマトーゼ飲まぬ人」の如く細く、万太郎氏はその反對なのに。

「本郷に非常に古風な足袋屋があるんだよ。そこで買ひたいと思ふ。」

「なるほど。」と、また私は呟いた。

足袋の話

足袋の話

「女房の奴、俺の白足袋の姿をひやかして、タイコモチのやうだと云つた。」

「ハッハッハ。」と私は好意を持って笑つた。「そのことをひやかしてゐたのか、僕にもさつ

きその聲は聞えたけれども、何のことだか解らなかつた。」

「洋服にかぎる！」

「あなたのその和服姿はなか／＼立派だ。」

「君こそ白足袋をはいたことはないだらうね。」

「結婚式の時も僕はたしか白足袋をはかなかつたやうに覺えてゐる。」

「それは誇張だ！」

「……白足袋、黒足袋なんて區別を、そんなに考へたこともない。」

「野蠻だなア！」

本郷の何とかといふ足袋屋は、なる程古風だつた。万太郎氏が、ちよつと面喰つた程お世辭の好い店だつた。

そこで白足袋を紺足袋にはき換へた万太郎氏は、番頭に「お世話様でした。」と云つて店を出た。

(一五) 梅本鹿山編足袋考——「足袋をこはぜ懸にすることは元祿より以前なるべし、然れ

ども後にこはぜ懸すたれて、紐付となり、寛保の頃に再びこはぜ懸行はれたるが如し。」八水隨筆——「吾足袋の事、後をこはぜ懸にすることは、予が父大阪に在りし時ふと拵へさせてより、その足袋屋の作のやうに云ひなし、おひたどしく仕込み江戸へ廻せしより一統にはやりしものなり。」

(一六) 靴の産業革命史は Blanche E. Hazard, The Organization of the Boot and Shoe Industry in Massachusetts before 1875. (Harvard Economic Studies Vol. XXIII)

(一七) Carl Fricke が Entstehung der Volkswirtschaft の第四章に説けるが如き産業進化の諸形式は、足袋産業に於ては、符節を合せたやうに現はれて居る。けれども産業發達の諸階段は論理的順序に、ある階段が終つて、他の階段によりて完全に代られるといふやうなこととはない。今日の足袋産業は大阪、久留米によりて代表された工場制度の階段にあるけれども、京都には家内工業制度が、東京には手工業が完全の形式に於て保存されて居る。

(一八) 大正十三年五、六、七月號國民經濟雜誌所載小島英一「北埼玉に於ける足袋事業」参照。

一九) つちや足袋合名會社「つちやだび沿革」。

(二〇) オートドックスの經濟學者は、かくの如き事實を如何に説明するであらう。合理的利己心のみが經濟生活を支配する根本動機なりといふことは、大部分に於てといふ條件をつけても受け入れ難い。

(二一) 補助足袋工程順序の大意は左の如くである。

- | | | | | | | |
|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|
| 1 入庫原料 | 2 生地検査 | 3 染工場 | 4 染色検査 | 5 端縫 | 6 片面糊付 | 7 片面乾燥 |
| 8 色合 | 9 巾検組合 | 10 端縫 | 11 テンター | 12 倉庫材料 | 13 生地引 | 14 側裁斷 |
| 15 裁検 | 16 穴明 | 17 色分 | 18 札付 | 19 請糸通 | 20 検査組合 | 21 甲腕付縫出 |
| 22 甲腕付 | 23 地縫縫出 | 24 地縫 | 25 地縫検査 | 26 地返 | 27 地返數讀 | 28 立胛 |
| 29 立胛切 | 30 立胛數讀 | 31 立胛検査 | 32 側返 | 33 甲腕付検 | 34 側餞 | 35 丸止 |
| 36 丸止數讀 | 37 丸止検査 | 38 先付縫出 | 39 先付 | 40 先付検査 | 41 廻り | 42 廻り切 |
| 43 廻り検査 | 44 絡ヒ | 45 糸切 | 46 仕返受渡 | 47 仕返 | 48 仕返検査 | 49 仕上 |
| 50 仕上検査 | 51 アイロン | 52 磯卷 | 53 袋入 | 54 箱入 | 55 札付検査 | 56 再検査 |
| 57 箱束 | 58 品別 | 59 庫入 | 60 荷揃 | 61 初検 | 62 再検 | 63 出荷札取 |
| 64 荷造 | 65 出荷 | | | | | |

(二二) Adam Smith, The Wealth of Nations, Bk. I chap. 1.

(二三) J. A. Hobson, Work and Wealth 参照。

(二四) 米國シンガーミシン會社は爪付け機の工夫改良に多大の貢獻をなした。

(二五) Arnold Toynbee, The Industrial Revolution, p. 208.

(二六) 出井盛之著「行動經濟學の立場より」の第二「非人間化した生産過程」を参照。

同著者の既刊書

行動經濟學の立場より

東京神田仲猿樂町 巖松堂

近代經濟組織と學說

東京日本橋人形町通り 東盛堂

The Modern Economic Life

東京牛込早稻田大學前 敬文堂

▲ 大正十四年一月十日印刷 大正十四年一月十五日發行 ▲

著作發行所 出井盛之

東京市外戸塚町源兵衛七五

印刷所 前田宗松

東京市神田區表神保町十番地

發行所 東京市外戸塚町源兵衛七五 多鼻會

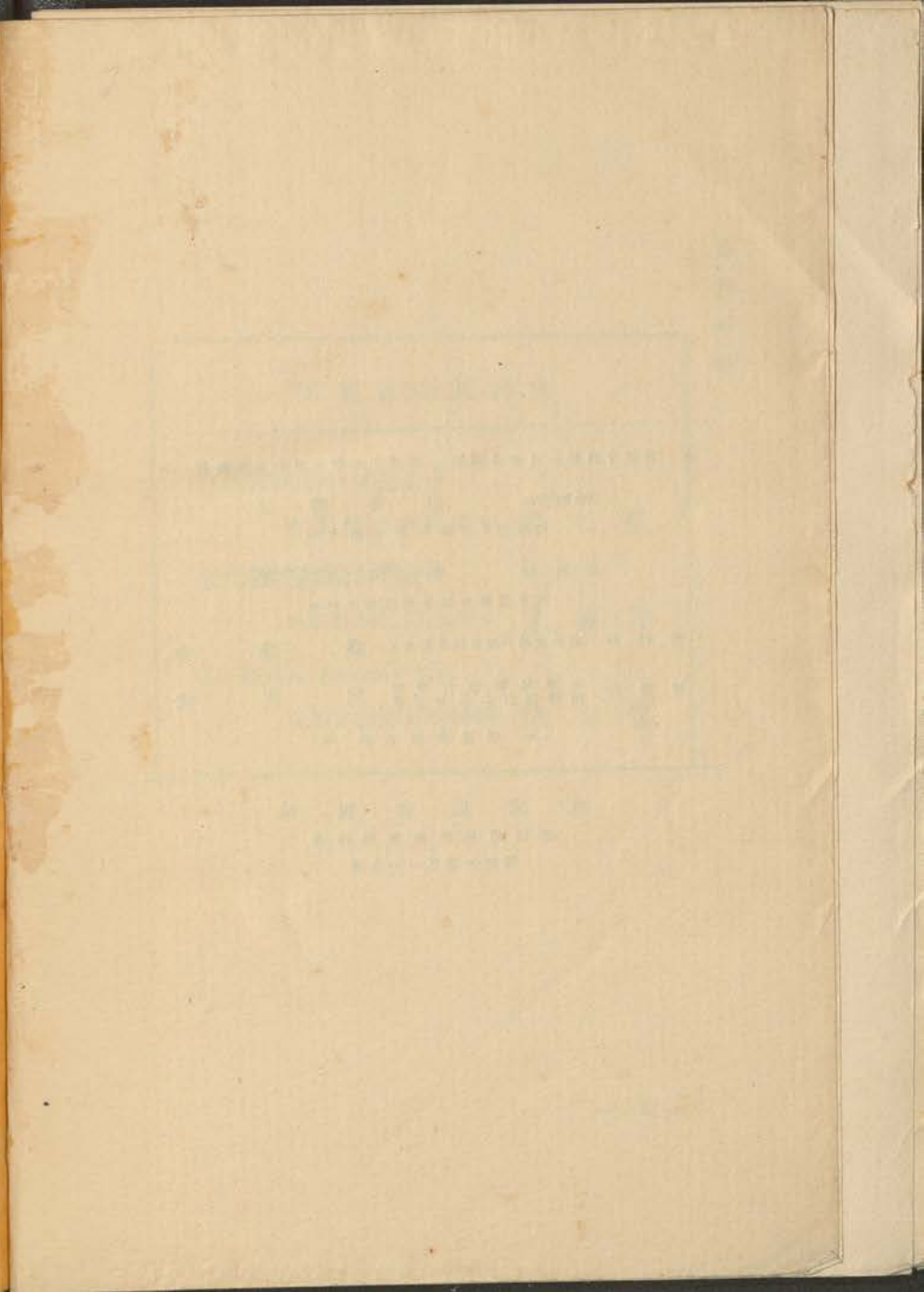
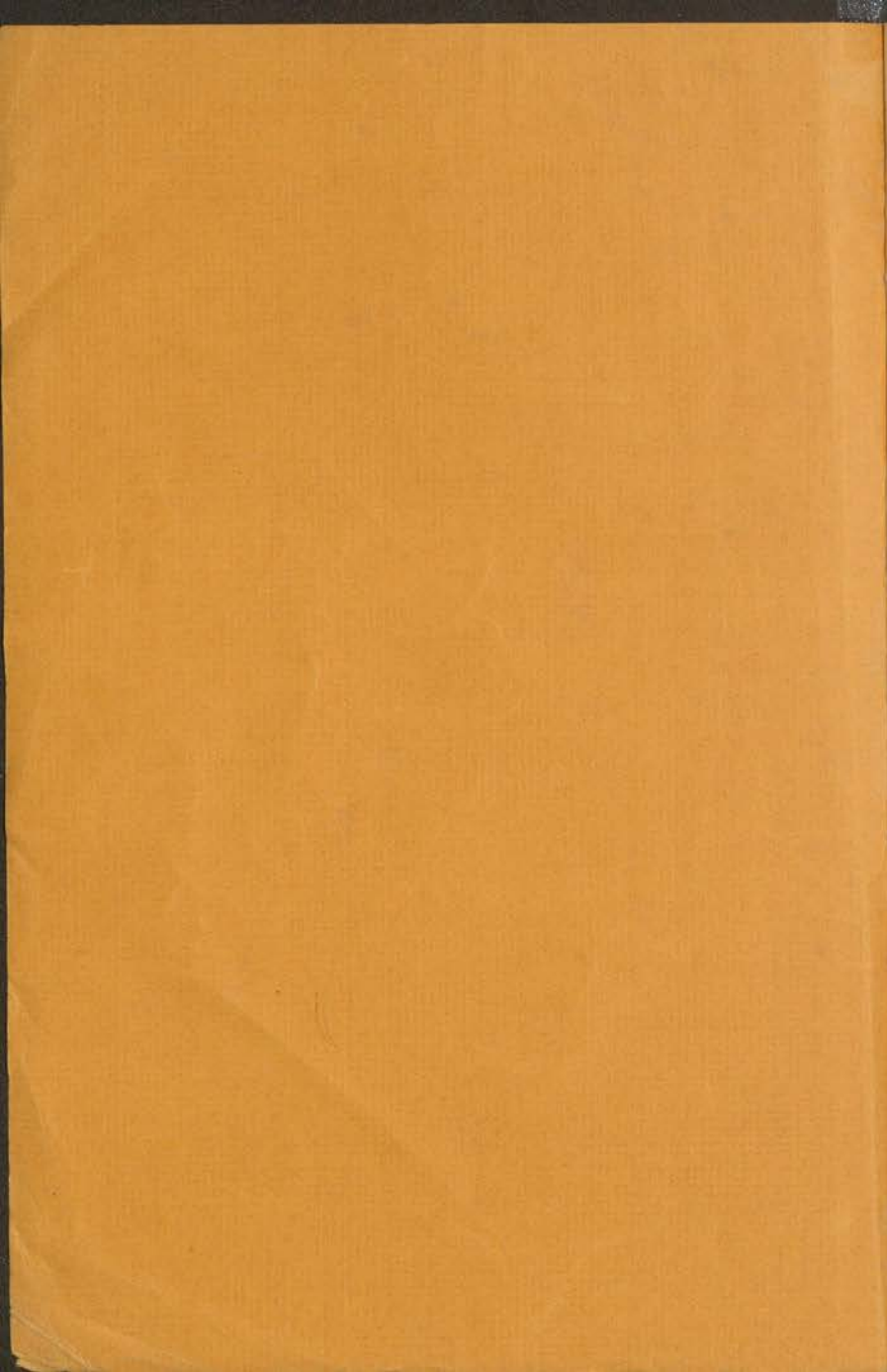
發賣所 東京早稻田大學前 敬文堂
總發東京二三七三番

▲ 定價金四十錢 ▲

文成社印刷所

東京市神田區表神保町

電話穴手五一一九番



24/10/21



埼玉県立図書館



31043265